豊橋市美術博物館友の会だより

2017年 Vol.98
FU風伯HAKU

展覧会紹介

第7回トリエンナーレ豊橋　星野眞吾賞展～明日の日本画を求めて～

8月11日(金・祝)～9月10日(日)　月曜日休館　豊橋市美術博物館 1階展示室

新進作家の発掘と顕彰を目的として3年に一度開催している全国公募展です。従来の概念にとらわれない日本画を全国から募集し、今回206点の応募がありました。審査によって選ばれた入賞・入選作品56点と過去の大賞受賞者の近作4点を紹介します。それぞれの作家の挑戦と試行錯誤、表現の多様性をじっくりとご鑑賞ください。

星野眞吾賞（大賞）
　財田翔悟(山形市・31歳)《かさねがさね》
準大賞
　中澤美和(藤沢市・34歳)《環る景色》
優秀賞
　吉賀あさみ(京都市・44歳)《黙》

◆大賞選評

エアブラシによる写実的彩色法を重ねた画面を「磨き上げ」る古典的漆技法を応用しつつ、見る者と見つめられる者との交錯する「静かな視線のドラマ」の中で、現代に生きる人間心理の微妙な動きを捉えた作風の独創性を高く評価した。

審査員・野地耕一郎
(泉屋博古館分館長)

財田翔悟《かさねがさね》

◆アーティストトーク
8月11日(金・祝)
午後1時30分
～2時30分

漫画界のレジェンド　松本零士展

9月2日(土)～10月22日(日)　月曜日休館(9/18・10/9は開館し10/10は休館)　豊橋市美術博物館 2階展示室

漫画・アニメ界の巨匠、松本零士は宇宙を舞台にしたSF作品を数多く手掛け、私たちに夢とロマンを与え続けています。

9歳のころから漫画を描き始め、15歳で『漫画少年』新人王受賞作が掲載されデビューしました。1971年から『少年マガジン』に連載した『男おいどん』が大ヒット。その後『宇宙戦艦ヤマト』や『銀河鉄道999』など名作を次々と発表し、1970年代半ばから80年代にかけてアニメブームを巻き起こしました。また『宇宙海賊キャプテンハーロック』はフランスやイタリアでも放映され、人気を集めています。

本展覧会では、直筆の漫画原稿やアニメのセル画、立体模型などを通して60年以上にわたる創作の歩みを紹介しながら、松本零士の世界観に迫ります。　（学芸員　田中竜也）

《零士ファミリー》　©松本零士

松本零士（まつもとれいじ）プロフィール
1938年福岡県久留米市生まれ。本名松本晟（あきら）。父は陸軍航空隊のパイロット。1954年「蜜蜂の冒険」で漫画家デビュー。1972年「男おいどん」で講談社出版文化賞受賞。2001年紫綬褒章、2010年旭日小綬章、2012年フランス芸術文化勲章シュヴァリエ章受章。代表作に『銀河鉄道999』『宇宙戦艦ヤマト』『宇宙海賊キャプテンハーロック』等があり、国民的なアニメブームを巻き起こした。

ニャンダフル! 浮世絵ねこの世界展

～国芳、広重、国貞、豊国、英泉… 江戸・明治の浮世絵師たちが描く～

7月15日(土)～8月27日(日)　月曜日休館(7/17·8/14は開館し7/18は休館)　豊橋市二川宿本陣資料館

猫は古来より人間のペットとして飼育され、人にとって身近な存在でした。江戸時代に入ると、猫は浮世絵にも描かれるようになり、名だたる絵師が「美人とねこ」をテーマに描きました。そのなかで、歌川国芳は猫を主役として浮世絵の画題に採用し、擬人化や曲芸をする猫、踊りやパフォーマンスなど愛らしい猫を数多く描きました。

本展覧会では、「猫の浮世絵=国芳」といわれるほど浮世絵に猫を描いた国芳や、「名所江戸百景」の中で哀愁に満ちた猫を描いた広重、美人とともに猫を描いた国貞、豊国、英泉など、江戸から明治にかけて活躍した浮世師たちによる「浮世絵ねこの世界」を紹介します。可愛らしい猫から恐ろしい猫まで、浮世絵の中で自由自在に動き回る猫たちをじっくりとお楽しみ下さい。

(学芸専門員　和田　実)

◆記念講演会「浮世絵の猫ブーム」

と　き：7月16日（日）午後2時～
講　師：稲垣進一さん(国際浮世絵学会常任理事)
定　員：50人（申込順）
受講料：無料（入館料必要）
申し込み：電話にて二川本陣資料館
(☎41·8580)へ

◆ギャラリートーク

※事前申し込み不要（入館料必要）
と　き：7月17日(月·祝)、8月12日(土)、23日(水)
各午後2時～
講　師：当館学芸員
会　場：二川宿本陣資料館 企画展示室

歌川国芳《猫と遊ぶ娘》

館蔵浮世絵展 「二川宿・吉田宿の風景」

9月2日(土)～9月24日(日)　月曜日休館(9/18は開館し翌日休館)　豊橋市二川宿本陣資料館

現在の豊橋市域には、江戸時代には東海道の宿場町が2つ存在しました。江戸日本橋から数えて33番目の二川宿と、34番目の吉田宿です。

江戸時代後期になると、浮世絵版画はそれ以前の美人画や役者絵から風景画が主流になりました。歌川広重の出世作《東海道五拾三次之内（保永堂版）》がヒットすると、数多くの絵師が街道を画題とした作品を発表しました。その時代背景には、庶民にとって伊勢参りなどの旅が身近なものとなり、街道の風景や風俗を描いた浮世絵が旅へといざなう格好の媒体として人気を得たことにもあります。

歌川広重《行書東海道 二川》

本展覧会では歌川広重・葛飾北斎・渓斎英泉など当代一流の絵師たちが描いた、二川と吉田の風景を紹介します。二川宿では、猿ケ馬場の柏餅茶屋が、吉田宿では吉田城と吉田大橋が画題として多く採用されました。それぞれの絵師が描く風景を比較しながら、江戸時代の街道を想像してお楽しみ下さい。　(学芸専門員　和田　実)

◆ギャラリートーク

※事前申し込み不要（入館料必要）
9月9日(土)、13日(水)　各午後2時～
講　師：当館学芸員
会　場：二川宿本陣資料館 企画展示室

友の会創立30周年記念事業

4月21日に穂の国とよはし芸術劇場PLATで「白洲信哉、日本の美を語る」が開催されました。白洲信哉氏（文筆家、父方の祖父母が次郎・正子）による基調講演と、青柳恵介氏（古美術評論家）との対談の内容を抜粋してご紹介します。

基調講演 「日本の美」

白洲信哉

「日本の美を語る」なんて大それた話はできませんので、普段の仕事と絡めながらお話したいと思います。

豊橋には去年手筒花火を、その前は奥三河の花祭も年明けの極寒に見に来ています。各地に文化があり、地域によって個々の違いがある。そういうものがふわっと集まったのが、日本の文化・美だと思います。

美は多様です。日本人は美しいと思ったら分け隔てなく取り入れ、ミックスして使う。『目の眼』4月号で扱った茶の湯を例に挙げます。唐物や高麗茶碗など、中国や李朝からの輸入品を取り入れアレンジしたのが利休のすごいところです。当時は現代美術ですからね。後の柳宗悦の民藝も似たことで、白磁の魅力を発見しました。

今回は美術館関係の集まりですので、美術館で鑑賞することについてお話します。日本中、どこに行っても世界の美術品が見られますが、青山二郎の「美は創造であり、発見である」の言葉通り、各自で眼、見方を養っていただきたいと思います。イヤホンガイドや図録などなくても、まずは自分で見て、感じてほしい。知識は後から付いてきます。そして美術館で見る一番の意味は、大きさがわかることです。実物ならではの存在感を味わってほしいですね。

でも、美術館にあるから特別なものというわけではなく、巷にあるから価値が低いというわけでもありません。器には、日常で大切に使ってきたという歴史があります。古美術品は、時代の流れの中でいっとき所有されても、次の世代に渡されていくものです。

白洲正子は美術館に飾られた楽茶碗を見て、「終身刑だよね」と言っていました。人に使われるために作られた物が、ライトを浴び、じろじろと見られる。そのモノ自体にとってはうれしいでしょうか。手で触れ、液体を注いで口を付け、使うことで器が育つ。景色が付く。いつの時代にも完成することはありません。

黒漆の上に朱漆を塗り重ねた根来（ねごろ）という器があります。はじめは朱一色ですが、使い込むうちに下地の黒色がまだらに出てきます。それも一個一個、模様が違います。剥落した器に美を見る。これも日本人ならではの感覚です。

「文化は明日の産業。未来への投資」です。フランスの美術館などでは、かなり自由に鑑賞できます。破損は困る。でも、研究だけではいけない。距離があると親しめません。文化財保護と観光との兼ね合いを取りながらも、美術館には理解のある活動をお願いしたい。

日本の美に話に戻すと、漢字を平仮名に、音読みを訓読みにというように、渡来文化を自分たちの自然観や風土に合わせて消化しています。例えば、中国から伝来した仏像も、異国的で男性的な像から柔和な姿に変わっています。

中国王朝は、国が亡びると前の時代を否定するため、文化が途切れます。一方日本では、一万年以上続いた縄文時代から時間、DNA、文化の素地がつながっています。神道も後から入ってきた仏教も、仲良く共存する。山の上にいた神様を、神輿や神棚など身近なところに下ろす。融通無碍（ゆうずうむげ）で、ミックスして作り変える。それが日本の文化です。

戦後、欧米の価値観が入ってきましたが、自分たちのオリジナリティ、今の時代に合った価値観、新たな日本の美を作っていけたらと思います。

対談 カントリージェントルマンと韋駄天夫人
「次郎と正子　愛の56年」

青柳恵介＋白洲信哉

青柳：僕は白洲正子さんが73歳のころから亡くなるまでの16年間、彼女とお付き合いさせていただきました。当時、次郎さんは81歳。存在感があって、最初は怖かった。でも彼と親しくなってから、「正子のような人と暮らしていて、僕を我慢強いと思ったでしょう」と言われました。

次郎さんと正子さんは明治のご夫婦ですが、「夫唱婦随」ではなく「夫唱婦唱」でしたね（笑）。両方が口火を切る。でも、互いに認め合っていた。「うちのばあさんは、必ずその場所に行くからね。あれはえらい」とも、おっしゃっていました。

東京五輪の年、正子さんは54歳のときに、西国巡礼に出かけました。次郎さんにとっては、吉田茂と共にまい進した戦後復興が一段落し、ほっとした時期だと思います。巡礼に出る正子さんを温かく見送ったのではないか。お二人は互いに自己主張をぶつけながらも、認め合っていた。信哉さんは身近にいて、どうでしたか。

白洲：いやぁ、そう言われても…。そもそも二人は一緒にいないですし。家族写真を撮った記憶もないんです。

大学生のとき、祖父母と暮らしていましたが、なにしろ人の出入りが多かった。気に入らない人だと一回きり、気に入った人は何度でも呼んでいました（笑）。

青柳：好き嫌いがはっきりしていたのは、お二人ともです。そして、現場主義なのも共通していましたね。

白洲：身近にいる者は大変でしたよ。祖父の葬儀の後、私の親たちは「ひどい親だったよね」と語り合っていました。子どもの入学試験の日取りさえ、覚えていなかったんだから。

青柳：でも、正子さんはうれしそうに話していました。

「信ちゃんが、あれ、くれっていうの。わかっているんだよね」と。

白洲：もらった物もあるけれど、「あんたにはまだ早い。こっちにしとき」とよく言われました。不思議なことに、もらった物を部屋に持ってくると、また違って見えたんですね。

青柳：正子さんとの旅の思い出はありますか。

白洲：会うといつも「今、何に興味あるの」と聞かれました。小学生のとき、「聖徳太子」と答えたら、次の冬休みに聖徳太子の軌跡をたどる旅に出ることになりました。知らない寺社にいきなり押しかけて、「あれ、見せて」って言うんです(笑)。そういったことが重なって、正子さんの文章はできています。

自分で歩かなければ、わからないことがあります。今思えばいい経験でした。

晩年は僕が車を運転して、何度も旅をしました。行動が過激で目立つから、付き合うのも大変だったけど、いろいろと楽しかった。

青柳：ところで、正子さんは最後に大きな買い物しましたよね。骨董屋の番頭と飲んでいたら、「いい物がある」と言って見せてくれたのが粉引（こひき）の徳利でした。感動して、夜中だったけど正子さんに電話したら、「いくら。―はは、引っくり返っても払えないよ」と。でも、翌朝電話をかけてきて「見えたよ、あれ買うわ」と言うんです。

白洲：実際に見ていないけれど、それが見えたんでしょうね。

祖母はその粉引と一緒に寝ていたんですよ。ある日、それを借りに行ったら、股の間から取り出した。人肌の粉引（笑）。

そこまでいけば幸せですよね。ああいうふうに好きなことをやって、思うままに生きられたら、と思いますね。

（編集：神野志保子）

春の研修旅行記

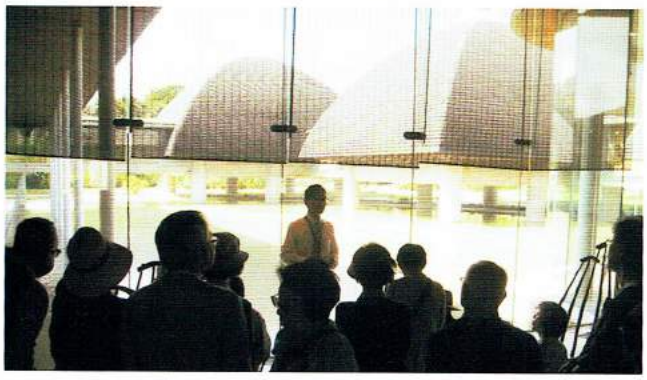
「東洋のガラパゴス・奄美大島　田中一村記念美術館をたずねて」（5月23日～25日）の参加者から届いた旅行記をご紹介します。

田中一村記念美術館を訪ねて

鈴木準之助（220）

海の中に柱を立ててその上に家、というインドネシアの住居をイメージしたような、鉄筋コンクリート造りの素敵な建物で、展示室は3棟。それが田中一村記念美術館だった。一村の作品が幼少時代、千葉時代、そして奄美時代に分けて展示されている。平成13年に開館し、平成20年には特別展示室が増設されている。

まず幼少時代の展示室。「これが10歳の少年の絵か！」と《蛤図》の色紙に驚嘆する。また、《水辺にめだかと枯蓮と蕗の薹》など20歳代までに、すでに完成された日本画家になっている。千葉時代の展示室は更に完成度が高く、南画風の作品もみられる。40歳代に四国、九州を巡った旅の絵は、後の奄美時代へと進む先駆けのように感じられる。そして、何と言っても第3室の奄美時代の作品が圧巻。《不喰芋と蘇鉄》はまるで抽象画のようでありながら、不食芋の花や蘇鉄のおしべ、めしべなど、全てが写実的に描写されている。総会の折の塩津青夏先生の講演で知った、立神様（神様が降りてくる通り道の海岸にそそり立つ岩）も描かれていて、奄美に対する愛情がヒシヒシと感じられる。特別展示室には《花と軍鶏》や《燕子花図》などの屏風や襖絵などが展示されている。とくに一村が39歳で青龍展に入選した《白い花》は傑作の一つで、奄美時代の絵の香りが伝わってくる。30年前、一村の展覧会で感動してから奄美に行きたいと思い続け、やっと願いがかなった。この美術館では年4回も作品の入れ替えがあるとのこと。ぜひもう一度行きたいと願っている。



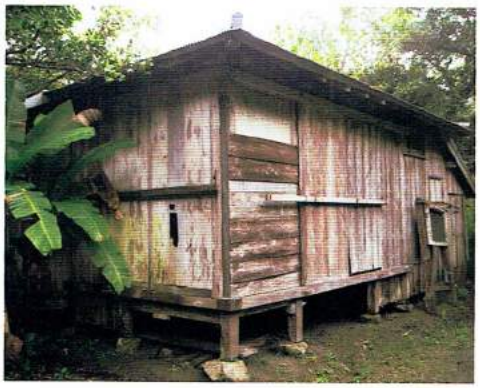
田中一村記念美術館で説明を受ける

奄美大島に旅す

田中のぶ子（3048）

友の会創立30周年記念研修に参加した。館長さんはじめ40名、仲睦まじげなご夫婦も目立ち、旅は和やかに始まった。1日目、すでに梅雨入りしていた島は青空を見せ、一行を迎えてくれた。早速第一の目的地、田中一村記念美術館を見学。一村の縁の地で観る絵は、一段と印象深く心に残った。2日目は大浜海岸、高知山展望台、ホノホシ海岸、旧日本軍弾薬庫跡を訪れた。最後にマングローブ原生林を巡ったときは、我が相方の希望で、遊覧船の代わりにカヌーを初体験することになった。あちこちぶつかりながらも戻るころには、ポツポツだった雨が本降りになった。3日目に田中一村住居跡へ行く。ガジュマルの木が空を覆うように枝を広げていた。一村の清貧な生活ぶりがうかがわれるたたずまいだった。大島紬村では、紬の生産に必要な行程の多さと作業の緻密さに感嘆した。最後に黒糖焼酎工場で製造工程を見学して試飲。買物も盛況だった。

なんといってもこの旅行を一段と楽しませてくれたのは、バスガイドさんであったと思う。見送りのとき、ガイドさんの大きな黒い瞳は心なしか潤んでいるようだった。島の現状、文化、歴史、自然など興味は尽きなかったが、明日からの我が生活を思いながら帰路についた。時間が経過するにつれ、旅の思い出は熟成されていくことだろう。いろいろな企画を立て、お世話してくださった方々に感謝いたします。



塩津青夏氏（愛知県文化芸術課トリエンナーレ推進室勤務）を講師に迎えて開催した友の会総会記念講演会「田中一村と奄美」（5月16日、会場：穂の国とよはし芸術劇場PLAT）の要旨をご紹介します。

田中一村は1908年栃木県で生まれた。7歳のとき、児童画展で天皇賞（あるいは文部大臣賞）を受賞した。11歳で描いたハマグリの絵で早熟な才能を見せた。南画を勉強し、1926年に東京美術学校へ入学するも、家庭の事情により2カ月で退学した。同期に東山魁夷、橋本明治などがいた。1931年に南画と決別し、1938年千葉に転居。1958年には中央画壇への絶望から奄美大島へ移住した。一村は奄美特有の信仰を理解したうえで自然を描いた。

《不喰芋と蘇鉄》には深い森の中からわずかに見える海と立神の岩が描かれている。《草花に蝶と蛾》では一村が蝶や蛾を凝視する姿が目に浮かぶようである。その他アダンやアカショウビンなどの絵がよく知られている。人間の深層心理を見事に表現していると思う。

1977年中央画壇には認められないまま、69歳で没する。没後NHKの『日曜美術館』で紹介されるとその独特な画風が注目され、「日本のゴーギャン」と呼ばれるようになった。絵を通して一村の生きざまを感じてほしい。

（髙須博久）

はじめまして　よろしく！　新理事・新職員紹介

新理事

水藤 之資（すいとう ゆきもと）

宮田会長からお声がけいただき、豊橋のまちに少しでもお役に立てればとの思いからお引き受けすることとなりました。友の会の皆様の足を引っ張らないように頑張りますので、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

高倉 一代（たかくら かずよ）

今年度より理事をさせていただくことになりました高倉です。これまでに友の会の旅行などで、お世話になっています。皆様のご指導のもと、楽しみながらお仕事ができたらと思っています。よろしくお願い致します。

新職員

野澤 和久（のざわ かずひさ）

美術博物館 事務長補佐

趣味／ドライブ、旅行、渓流釣り、音楽鑑賞

ひと言／今までの仕事の経験を活かし、美術博物館をはじめとする各施設も含めて、魅力向上に努め、入館者増につなげていきたいと思います。

山田 静人（やまだ しずと）

二川宿本陣資料館 嘱託

趣味／ドライブ、バレーボール

ひと言／秋の大名行列の担当として、二川南小に勤めた経験を生かしてがんばります。

●お世話になりました

野口 尚さん（美術博物館 事務長補佐）→東部学校給食共同調理場長／根木真太郎さん（二川宿本陣資料館 嘱託）→退職

豊橋市美術博物館友の会賛助会員一覧（50音順・敬称略）

友の会活動にご支援をいただき、ありがとうございます。

㈱アーチザン／㈱アイセロ／青山建設㈱／旭精機㈱／渥美運輸㈱／井口土建㈱／㈱イズミテック／㈱イデアル・アトレ／エール・フォルトゥーナ／SMBC日興証券㈱豊橋支店／(宗)円成寺／大岩整形外科・皮フ科／(医)慈豊会大島整形外科クリニック／㈱オーテック／㈱小倉屋／ガステックサービス㈱／㈱金田石油店／蒲郡信用金庫／管財㈱／共和印刷㈱／国盛商業㈱／(医)光生会光生会病院／㈲髙誠堂／(医)常念会権田脳神経外科／サーラ住宅㈱／㈱サーラビジネスソリューションズ／特別養護老人ホーム作楽荘／三遠機材㈱／(医)三遠メディメイツ／㈱三光製作所／㈱シミズ／神野建設㈱／杉本屋製菓㈱／㈱スミ電機工業所／㈱精文館書店／㈲創喜商会／綜合警備保障㈱豊橋支社／㈱大建／大三紙業㈱／㈱大仙額縁事業部／ダイハツ豊橋㈱／(学)高倉学園／(医)一誠会タキカワ整形外科クリニック／㈱中部／中部瓦斯㈱／中部瓦斯㈱豊橋支店／中部ガス不動産㈱／中部採石工業㈱／東三建設㈱／トヨタネ㈱／豊鉄観光サービス㈱／トヨネン㈱／豊橋塩業㈱／㈱豊橋園芸ガーデン／豊橋才能教育こども園／豊橋商工信用組合／豊橋信用金庫総合企画部／豊橋調理製菓専門学校／豊橋鉄道㈱／豊橋ヤナセ㈱／㈱花田工務店／㈱ビオック／(医)正眼堂疋田歯科医院／(医)さわらび会福祉村病院／㈱藤城工務店／(学)藤ノ花学園／㈱藤本商會本店豊橋営業所／㈱プライズメント／㈱紅久商店／老人保険施設ベルヴューハイツ／峯雲会／㈱豊川堂／本多プラス㈱／松坂司法書士事務所／(医)松崎病院豊橋こころのケアセンター／㈱丸金商会／丸善深見建装㈱／(医)三浦医院／mixs.／㈱三菱東京UFJ銀行豊橋支社／㈱都デザイン／向山デベロッパー㈱／(医)村田小児歯科センター／㈱メガネ流通センター／㈱物語コーポレーション／やまざき歯科クリニック／ヤマサちくわ㈱／ユタカコーポレーション㈱／(医)横山内科／ワルツ㈱

以上90社（平成29年6月末現在）

収蔵品紹介

斜陽

中村正義●NAKAMURA Masayoshi (1924-1977)

1946年　紙本着彩、額装　90.8×121.0cm　第2回日展出品　1982年度山本貞氏寄贈

花鳥画のように穏やかで清廉な印象を受ける風景画。豊かな竹林が広がる光景は、日本画家・畔柳赫（くろやなぎかく）が疎開していた夫人の実家（岡崎市）の裏手に取材したもの。畔柳は豊橋に居を構えていたこともあり、何度も訪れて交友していました。

本作には、複数の下絵が存在します。それらから、アゲハ蝶や竹林の配置、色彩において様々な実験を行っていたことが分かります。自由に羽根を広げて飛び回る蝶に、肺の病と闘いながら制作を進めていた自身の姿を重ねていたのかもしれません。

作品名が示す通り、西からの光に竹の葉が明るく照らされています。正義は、《夕陽》（1949年）、「太陽と月シリーズ」（1969年）に見られる《日》など、「日／陽」をテーマした作品を何点も残しています。これらとは異なり、本作においては直接太陽を描くのではなく、差し込む光によって表現しています。なお、太宰治による同名の小説が発表されたのは、翌年の1947年です。

1946年に正義は中村岳陵の私塾「蒼野社」に入り、研鑽に励んでいました。そして、第2回日展で初入選を果たします。全国画壇へのデビュー作で、初期を代表する作品です。

1977年4月16日に正義が亡くなってから40年が過ぎました。美術資料の第2期常設展では、「没後40年 中村正義」と題し、初期から最晩年にいたる17件を紹介しています。ぜひご覧ください。

（学芸員　細田樹里）

◆第2期常設展（8/20まで）にて公開。
7/25(火)～29(土)は建物調査のため休館。

編集後記

「親分、大変だ大変だ！」

「おう、八、どうしたってんだ、そんなに慌てて」

いや、失礼しました。なにしろ今年は企画展が普段より多く組まれているうえ、友の会発足30年、『風伯』も年度内に100号を迎えるという記念すべき年なのですから、テンションも高くなろうというものです。

100号記念号ではどういった特集を組むか、思い出の展覧会や行事は、発行時期は、などなど考えることはいっぱいあります。魅力ある紙面つくりのため、皆様にお知恵を拝借したり寄稿をお願いしたりすることもあると思いますが、よろしくご協力お願い申し上げます。

（神野志保子）

【表紙作品】

「銀河鉄道999」　©松本零士

◆「漫画界のレジェンド　松本零士展」(9/2～10/22)で公開予定。

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第98号

編集・発行　豊橋市美術博物館友の会
会　　長　宮田正人
編 集 長　髙須博久（副会長）
編集委員　鈴木冷子　神野志保子　河邉満江　藤本逸子
　　清水貴裕　髙倉一代　久曽神真喜
協　　力　豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1　TEL.0532-51-2882
平成29年7月15日発行